福音を福音として聞いてもらえるように

2013年10月10日
西九州伝道所
佐々木正明

言うまでもないことですが、私たち日本人は、聖書の世界から見ると異邦人です。聖書は、直接的にはユダヤ人（イスラエル人）に対して書かれています。新約聖書のある部分は、異邦人も含めた当時のクリスチャンたちを対象に書かれていますが、それらの異邦人はかなりユダヤの文化に同化した人々で、クリスチャンになる前からユダヤ人の神を崇め、旧約聖書、つまり、律法になじんでいました。現代の日本人のような完全な異邦人は、聖書の読者としては想定されていないのです。ですから、私たち日本人が聖書を読んで、その本質的なところを理解することは、至難の業なのです。聖書を持っていない異邦人に、聖書さえ与えれば何とかなると、単純に考えるのはとんでもない間違いです。

一方、多くのクリスチャン、特に西欧のクリスチャンたちが、自分は異邦人であるという自覚を持っているというのは、むしろ稀なことです。あたかも自分たちに対して書かれているかのような感覚で、聖書を読んでしまいます。そのために、異邦人に対する神の取り扱いについては、ほとんど無頓着になっています。たとえ、自分たちは異邦人であると知っていても、自分たちは血筋においては異邦人であっても、信仰においてはアブラハムを父とする、霊的なイスラエル人であるという神学をもって、納得してしまっています。

神を知らない民族、神がご自分を現してくださらなかった民族、聖書が与えられなかった民族についての神の取り扱いなどに、ほとんど興味が及ばないのも無理はありません。しかし私たち日本人は、イスラエル人のような神の自己顕現を拝することはありませんでした。神の救いも体験していません。聖書も与えられていません。霊的なイスラエルにもなっていません。

イスラエル民族は神の救いのご計画を教えられ、救い主を与えられ、救いに至る道を教えられていますが、日本人は何も知らないのです。このような日本人、あるいは世界中に非常に多く存在している、日本人のような神を知らない民族に対して、またその中の一人ひとりに対して、神はどのようなご計画をお持ちなのでしょうか。

ユダヤ人から始まった福音宣教の原理によれば、福音は全世界に宣べ伝えられ、全世界

の人々が天地創造の神の前で膝をかがめることになるのですが、福音を聞く機会がなかった人たちはどうなるのでしょう。福音を聞いても理解できなかった人たちはどうなるのでしょう。音として福音を聞いたとしても、その内容が理解できない形でしか、聞くことができなかった人たちはどうなるのでしょう。チャバカノ語（125 あるフィリピンの部族語の一つ。スペイン語に非常に近い）の福音を聞いても、日本人にはわかりません。高等教育を受けた人が使う専門用語と、哲学的思考で語られた福音は、同じ日本語であっても無教育の八っつぁん熊さんには理解できません。

使徒パウロは異邦人への使徒として、異邦人の神学の基盤を敷いた人物です。とはいえ、パウロが接触した異邦人は、現在の日本人のような、まるっきりの異邦人ではありませんでした。確かに彼は異邦人の地に入り、異邦人に福音をもたらす働きをしています。しかし彼自身が直接、まったくの異邦人に福音を語ることはごく稀でした。彼がやっていた方法は、大都市にあるユダヤ人たちの会堂に入って、そこに来ていたユダヤ化した異邦人たちに福音を語ることでした。そこで信仰をもった異邦人を通して、結果として、より広い異邦人世界に福音をもたらすことになっていたのです。

言い変えると、パウロは異邦人の神学の基礎はすえましたが、その上に建物を建てるまでには至っていないのです。その建物を建て上げるのは、私たちのように、完全な異邦人世界から天地創造の神を信じるようになったクリスチャンです。自分たちは異邦人であるという自覚の上に立った、クリスチャンたちの、まだ救われていない同胞への一途な愛が、それを成し遂げさせるのです。世界中の大部分の人間は異邦人ですが、まだキリスト教の力が弱い日本でこそ、この異邦人のための神学が構築されるべきだと感じますし、日本人は性格的に、そのようなことができる民族だと思うのです。

Ⅰ．　神に似せて造られた人間本来の姿をとどめている日本人　（創 1：27）

人間は神ご自身によって、神ご自身に似せて造られました。人間が神を礼拝し、神の栄光を現し、神との交わりを楽しみ、幸せに生きるように、神の愛と慈しみの対象として造られたのです。人間は神に似た霊的な存在として造られ、本能的に神を感じるように造られているのです。

人間は一人の人の罪のために、罪の世界、悪魔の支配の下に陥れられましたが、それによって神に似せて造られた性質を、完全に失ってしまったのではありません。神に似せて作られた麗しい姿がことごとく破壊され尽くしたのでもありません。確かにある部分は失われ、ある部分は壊れ、捻じ曲げられてしまったのですが、まだまだ、神に似せて造られ

たもともとの姿をたくさん留めているのです。

ただ、罪によって神との交わりを絶たれた人間は、命を失い、永遠の滅びを運命付けられてしまいました。神の栄光を受けるに足りないものとなってしまったのです。人間の内に残されている神に似た姿では、神に近づくこともできないし、運命付けられた滅びから免れることもできないために、神の救いを必要としているのです。

間違ってはならないのは、神の救いを必要としていることが、神の姿をまったく失ってしまったということではないという点です。神の姿に似た美しいものをたくさん所持しているのです。だからこそ、神の救いを必要としている罪人の中にも、ほとんどのクリスチャンには逆立ちしてもできないような、立派な行いをする人たちがたくさんいるのです。クリスチャンと呼ばれる人々より、よほど優れた、正しく、愛に満ちた生涯を送っている人たちも少なくないのです。

Ⅱ.　日本人を裁くのは聖書ではなく日本人　（ローマ 2：12～16）

たとえ神に似せて造られたとはいえ、日本人もアダムの子孫です。永遠の滅びに定められているものです。神に似ているということをもって、その滅びから逃れることはできません。

ところが日本人を裁くのは、欧米で構築されたキリスト教の教えでも、聖書の教えでも、旧約の律法でもありません。日本人を裁くのは、日本人なのです。日本人一人ひとりの心に書かれている律法です。（ローマ 2：14，15）　聖書がはっきりとそのように教えているのです。

欧米型キリスト教と、それに彩られた日本のキリスト教の大部分は、日本人の宗教を見て偶像礼拝だと断定して糾弾し、神の裁きを語ります。でも、偶像礼拝の罪はイスラエル人に対して語られたものであって、つまり、神の自己顕現と律法を与えられている人々に対しての規定であって、律法を与えられていない民族を拘束するものではありません。旧約聖書を読んでも、イスラエル民族に属さないものが、偶像礼拝のために神の叱責と裁きの対象になっていることはないのです。

日本人には神に似せて造られた善い性質が、本能として残っています。それは世界中の民族にも言えることですが、日本人には特に顕著です。その善い性質が、日本という文化の中で日本人の良心として、具体的に形作られています。日本人はその本能と良心によっ

て自分を制御し、拘束し、導き、さらに互いを裁きあっています。日本人の中に残されている神に似せて造られた本能は、かなり良く機能しています。

もう40年ほども前のことで、資料も正確に思い出せないのですが、イギリスの調査会社が、日本人は65パーセントがクリスチャンだという発表をしたことがあります。たしかドイツ人は60パーセントくらいで、アメリカ人は40パーセントほどでした。これに対し、多くの人が「とんでもない、日本人の中にはクリスチャンは 1 パーセントもいない」と、声を上げました。すると、「日本人の中にクリスチャンが何パーセントいるかの問題ではなく、日本人、あるいは日本の国民の生活、考え方、倫理道徳などすべてを見て、その中に聖書の教えがどれほど定着しているかということなのだ」という答えが戻ってきたのです。律法を持っていない日本人、聖書を知らない日本人のほうが、長い間キリスト教国として聖書を読み、神学を構築してきた大概の民族よりも、聖書の教えに合致した考え方をもち、聖書の教えに調和する社会を構築し、その中で生活をしていたのです。

日本人は、日本人の心に書かれている律法によって裁かれるのであって、聖書の律法によるのではありません。もちろん、欧米人が建てたキリスト教神学や倫理によってでもありません。日本人は互いに研鑽しあって、より良い文化を築き上げるのです。

Ⅲ.　日本人の本能による神礼拝　（ローマ 1：19）

神に似せて造られた姿を、どういうわけかより良くとどめている日本人は、古から本能的に、栄光の神の見えない永遠の性質を、そのまま認める宗教心を持ち続けてきました。途中から仏教の影響で、だいぶ崩れたところがありますが、いまだに日本人の精神的基盤は仏教にではなく、古来の宗教意識の表現である神道にあります。その神道の大きな特徴のひとつが、偶像を持たないということです。

「ご神体」という言葉があって、あたかも偶像があるかのように聞こえますが、ご神体が偶像として拝まれるわけではありません。たとえば神宮（伊勢神宮の正式な名）に祀られている天照大神のご神体は鏡ですが、鏡が神として拝まれるのではないのです。むしろ天照大神には実体がないのです。つまり姿形がないのです。その実態のない、大きく、奥深く、哀れみに富み、ありがたい神は、万物に宿っておられるという信仰を象徴しているのが鏡なのです。確かに鏡にも神は宿っておられるのです。多くの小さな神社では、米粒がご神体であったり、白い紙であったりしています。だれもそのような物体を拝みはしません。それが象徴している、目に見えない、体で触れることも、言葉で説明することもできない幽玄な存在を、拝んでいるのです。

日本人は、アダムの罪のゆえに命を失い悪魔の力の下に陥ったとはいえ、パウロがローマ書の一章で論じている、人間の愚かな偶像礼拝の罪をあまり犯していないのです。日本人は、被造物を通してご自分について知りうる事柄、すなわち、神の見えない性質、栄光の力と神性を示された神を認め、それを人や獣や鳥や這うものの像に似せて刻むことも、拝むこともしていないのです。

しばらく前のことですが、かつてアフリカで宣教師をしておられた日本人牧師と、このことについて話し合う機会がありました。その牧師は、アフリカの人々の多くも、宣教師たちによって偶像礼拝者だと決め付けられ、責められていますが、実はそうではないのだ。それは宣教師たちの早とちりだと、説明してくださいました。筆者はアフリカの人々のことは知りませんが、宣教師の早とちりは、異邦人の宗教を見たとき起こしがちな過ちです。最初の印象が、多分、違和感であるためでしょう。

ともあれ日本人は、神が被造物を通してご自分を明らかにされたことを、しっかりと受け止めて理解し、偶像礼拝の罪をあまり犯していないのです。そのために、神は日本人を、ほかの偶像礼拝者たちと同じように、心の欲望のままに任せられはしなかったのかもしれません。（ローマ 1：24） それが、罪の世界で悪魔の支配下に生活しながらも、日本人は比較的高い倫理観を維持し、神の祝福を楽しんで来ることができた理由の一つでしょう。

Ⅳ.　天地創造の神を紹介する手がかり　（使徒 17：27）

日本人の本能的な神観を表現している神道は、非難されたり叱責されたり揶揄されたりするべきものではなく、それを通して天地創造の神を正しく教える、大切な手がかりとすべきです。神道の中に誤りがないというのでも、不足がないというのでもありません。しかし何事においても正しい理解というものは、それに似ているけれども足りない理解、あるいは似ているけれども誤りのある理解を通して、得ることができるものなのです。神道の中の優れた部分、秀でた部分、正しい神理解の部分を大いに賞賛し、それを天地創造の神の姿に似せて造られた人間の、本能的神知識の残留として積極的に認めたらよいのです。

私たちクリスチャンが信じている神は、ザビエルによって日本人に紹介された神ではありません。明治初期の宣教師たちのスーツケースに入れて、運び込まれたものでもありません。古（いにしえ）から、日本人が心の中に感じ、あがめ、祀り、感謝をささげてきた、懐かしい神なのです。

ただし、現代の多くの日本人は神という存在を認めません。70～80 パーセントの日本人は、「神なんていない」と言ってはばかりません。そこが日本人の神意識の複雑なところです。日本人が神なんていないというときの神は、いわゆる八百万の神々に象徴される、神話化された神々です。あるいは、ご利益信仰の対象とされる神々です。これらの神々は、単に人間より強い力、不思議な力を持つと考えられた存在に過ぎません。人間が尊び、崇め、礼拝する存在としては、いささか下等で、品位に欠け、力不足なのです。

たとえば沖縄の南部に、俗にちんちん洞と言われる鍾乳洞がり、男根の形をした巨大な鍾乳石が天井から垂れています。近隣の人々は、昔からこの鍾乳石を繁殖力の象徴として拝んできました。この石自体を拝んできたのか、あるいはその石の中に存在を現している力に頼んでいるのか、外面だけでは定かではありません。そこで、実際に拝みに来ていた子宝に恵まれたい女性たちに聞くと、石自体を拝むのではなく、その中に潜んでおられる繁殖力を持つ存在に、お願いしているのだということでした。ただ、それはあくまでも、そういう力持つと言われているから、お願いするのであって、それを尊敬し、崇め、神として仕えるというのとは、まったく意味が違うようでした。

神なんていないという多くの日本人は、このような神々を、自然界で最高の存在である人間が尊び崇め、礼拝するべき存在としては認められないと言っているのです。しかしその同じ日本人が、自分の心の奥底にある宗教心、何者かを礼拝し、崇め、尊び、感謝する心を大切にし、たとえ誰が見ていなくても、誰も知らなくても、自分の行動と心を知っておられる方を静かに感じ、その方の存在を頼りに、良心的な生き方をしようと心がけているのです。この、何者かわからない尊いお方を、なんと呼んだら良いのか分からないけれど、「神」という下等な呼び方では呼びたくないために、「神なんていない」ということになるのでしょう。

日本人の精神的土壌である神道では、この日本人の本能的神意識を大切にしますが、ひとたび、その神意識を順序だてて組織的に説明しようとすると、とたんに行き詰ってしまいます。それで、いささか下劣な神話や民話になってしまうのです。それは人間の想像力をはるかに超えた無限の存在を、有限の人間の能力と言葉で表現しようとする無理が、そうさせてしまうのです。それで神道では、キリスト教がやるような、神についてのこまごましたと説明はしないのです。日本人にとって神は知的な説明、学問の対象ではなく、尊敬と畏敬と感謝と賛美の対象であり、理解するものではなく感じるものなのです。

ただ、そのような崇高な日本人の宗教意識、本能の狭間に、形あるもの、見えるものを拝みたいという低俗な欲求が入り込み、八百万の神々になってしまうわけです。万物の創造者である神は、すべてのものを超越し、すべてのものを貫き、すべてのものの内におら

れ、すべてのものを内に納めておられる唯一のお方です。この崇高なお方の概念から、ちょっとだけずれると、ねずみの中に潜んでおられる、ねずみの神になってしまい、八百万の神々のお出ましとなるのです。

　私たちはこのような神道的な感覚を通して、天地創造の神を紹介することができます。神ならざる神として紹介ができるのです。神という言葉では表現できない尊いお方、天地万物をお造りになった方を示すことができるのです。昔、旧約聖書が書かれ始めたとき、天地の創造者はご自分をなんと呼び、どのように、何も知らないイスラエルの民衆にご自分を紹介すべきか、大いに苦心されたようです。当時の人間が用いていた言葉では、絶対に言い表すことができない崇高かつ幽玄なご自分を、当時の限られた言葉で紹介しなければならなかったからです。結局、まったく不充分ではあったけれど、当時の人々が礼拝対象のひとつとして用いていた、エローヒムという言葉をお選びになったのですが、すぐに、この言葉に新しい説明を加え、その定義を変えなければなりませんでした。そのために用いられたのが、天地創造の物語なのです。日本人クリスチャンが、天地を創造されたお方を「神」という意味不足、内容不足の言葉で表現しなければならず、いろいろと苦労しているのと同じ問題があったわけです。

　アブラハムは、最初、天地の創造者である神について、ほとんど何も理解していなかったと思われます。そのアブラハムと彼の子孫に対し、神は非常に忍耐深く長い時間をかけて、ご自分の姿を示し、導いてくださいました。異邦人の国日本で、天地創造の神を紹介する私たちも、相当な年月と努力が必要であることを、覚悟しなければなりません。

V.　律法無しに滅びる日本人　（ローマ 2：12）

　日本人は律法無しに生きています。律法を持っている国の人々より、結構うまく生きていますし、穏やかな社会を作っています。だからといって、日本人がそれで救われることはありません。律法を持たない日本人は、律法無しに滅びるのです。ただ、律法によって裁かれるのではないということです。律法を持っているものは、律法によって裁かれますが、律法を持たない私たちの同胞は、心に書かれた律法によって裁かれるのです。(ローマ 2：14～15)　つまり、神に似せて造られた本姓、本能がもたらす人間性によって裁かれるのです。

　神に似せて造られた人間の本性は、それを色濃く残しているかどうかは別として、本能となって、あらゆる文化に住む人々に共通して存在するものです。その本能が特定の文化、状況、環境の中で具体的な形を取って人々の心を捉えるのが、良心であると言えるでしょ

う。だから、この良心が人の心に書き記される律法について証をするのです。日本人はこの良心を鋭くしているのです。

その日本人に対し、聖書の教えを物差としてはならないのです。むしろ、日本人の本能にある気高さ、やさしさ、あるいは美しさと出所を同じとする、より優れた指針として聖書を語るべきです。日本人の倫理や道徳が、聖書の教える倫理や道徳よりも劣る場合でも、それで日本の倫理道徳を責めたり非難したりし冷笑したりしてはなりません。むしろ、より明確な教えとして聖書を提示すればいいのです。

旧約聖書の預言者気取りで、日本の社会悪を責めるのは愚かしいことです。預言者の働きはイスラエルの罪を責め、イスラエルに関わりのある民族の邪悪を糾弾することであって、イスラエルとはなんの関わりもない、はるか東の国に住む人々の悪を責め立てることではありません。日本人の規律は聖書から生まれたのではなく、日本人の本能、善を求め、公平を求め、正義を追い、慈しみを追求する、人間の本性、すなわち天地の創造者に似せて造られた姿から、派生したものです。当然、聖書の明確な教えから見ると、劣るところ、足りないところがたくさんあるはずです。それでも、日本人はかなりよい性格を持ち、相当優れた社会を形成してきました。聖書を持つ西欧の国々に勝るとも劣りません。

日本人に必要なことは、聖書によって裁かれることではなく、聖書の教えによって救いを見出すことです。日本人にまず必要なのは、律法を持っていたユダヤ人のように、律法に記されている罪を悔い改めることではありません。天地の創造者としてご自分を表してくださったお方を知り、そのお方を崇め、そのお方に感謝し、そのお方を称えて生きることです。そのお方の愛と慈しみと力に信頼して生活することです。そのお方の大きな恵みに浴して来ながら、充分な感謝をささげてこなかったのを詫びることです。日本人は、さまざまなところで目に見えない大きなお方に感謝を捧げて来たとはいえ、決して充分な感謝ではありませんでした。日本人は恩を感じていながら、その恩に報いる気持ちが高められず、感謝の念を抱きながら、それをしっかりと表現しては来なかったのです。いわば、不義理を続けてきたのです。

誰にどのように感謝をしたら良いのか、良く分からなかったという言い訳もできますが、やはり、長い間不義理を重ねて来たことには違いありません。これをお詫びするのです。そして、これからははっきりとこのお方を意識し、このお方に感謝をささげ、賛美をささげるのです。そうするならば、このお方は私たちの不義理を赦し、さらに多くの失敗や間違いや犯罪を赦して、私たちを受け入れてくださり、私たちが本来味わうべき神との交わりの喜びを回復してくださり、再び生き返らせて、永遠の命を与えてくださるのです。

私たちがキリストを信じて罪を悔い改めて、神に受け入れられるのではありません。それはユダヤ的な表現であり、異邦人への福音がまだ完全には築き上げられていないときの表現であり、西欧キリスト教的な表現です。私たちはアブラハムのように神を信じて義とされるのです。アブラハムは、キリストのキの字も知らないまま、十字架の救いについても聞いたことがないのに、神を信じて義とされました。アブラハムが知らなくても、神がご存知だったのです。私たちの周辺の異邦人もアブラハムと同じように、キリストを知らなくても、キリストが十字架の上で成し遂げてくださった贖いの働きのゆえに、天地の創造者である神を信じて救われるのです。

VI.　理解してもらうのではなく、知ってもらう

福音を福音として聞いてもらうと言うと、すぐに頭で理解してもらうことを想定します。確かにある程度の理解は絶対に必要です。ところが神は、ちっぽけな人間の有限な頭で理解できるほど、小さなお方ではありません。また神は、物理や科学の学びの対象ではなく、人格（神格）をお持ちになって、喜び、悲しみ、怒り、慈しみ、痛み、いとおしむお方です。つまり、学びや探求の対象ではなく、お付き合いの相手、信頼の相手なのです。

幼稚園の先生に 3 歳児をあずけるとき、先生がいつどこで生まれ、どんな教育と訓練を受け、どんな資格を持ち、どんな賞罰の対象になったかなどということを、くどくどと説明することはありません。ただ、「いつでもこの先生がついているからね。困ったときはこの先生にお願いするのよ。とっても優しい先生だから、心配しないで何でもお話しするのよ」と、信頼すべきであることしっかりと教えます。

私たちが神を信じるというとき、信仰を持つのではなく、信頼するのです。信頼は付き合いによって生まれます。信頼するごとに応えられて、信頼の度合いを増して行きます。そして幼稚園児が先生を好きになるように、神が大好きになります。慕い、敬い、愛するようになります。

神について語るとき大切なのは、理屈で神を説明することではなく、たとえ理屈は分からなくても、神とお付き合いを始めるようにお勧めすることです。神に祈り、感謝し、賛美してお付き合いを始め、なんでもお願いして行くことです。神はそれをお喜びになって、いろいろな形でお応えくださいます。理解していなくても、分からなくても、信頼すれば大丈夫。だから福音なのです。3 歳児が幼稚園の先生の手を握るように、神の手を握ればよいのです。その信頼が体験的な信仰となって積み重ねられ、その積み重ねられたものが聖書の教えによって確認されることによって、単なる体験的信仰ではなく、聖書の教えの裏

づけを持つ信仰となるのです。

結び

　私たちが日本人に向けて語る福音は、日本人に理解され、日本人が福音として聞くことができるものであるべきです。私たちは今まで、日本人に福音と理解されるように、また福音として受け入れられるように、福音を語ってきたでしょうか。ユダヤ人に当てて書かれた聖書を、何の説明もなしに、直接語り、その厳しい道徳や倫理を押し付け、要求してきたのではないでしょうか。神に似せて造られた姿をたくさん残している日本人の、生きる姿を認めてこなかったのではないでしょうか。永遠の神の見えない栄光の姿を、人や獣や鳥や這うものの姿に似せて刻んだり、それらを拝んだりすることなく、見えないまま、触れられないままに残して、畏れ尊び、崇め、称えてきた日本人の宗教観を、理解しようともせずに、一方的に断罪し糾弾し続けてきたのではないでしょうか。

　大きな反省を持って、福音を福音として聞くことができるように。また、頭で理解するのではなく、心で信頼してもらえるように語りたいものです。